



介護職の人材育成・ 人材マネジメントのヒントを情報発信！

～介護職員及び組織に対する育成をトータルサポート～

発行元：ピーエムシー株式会社

〒955-0845 新潟県三条市西本成寺 1-35-4

TEL:0256-47-3686 FAX:0256-35-0158

<https://www.pmc-jinzai.com/>

過去のニュースレターは HP からご覧いただけます

環境の変化がもたらす影響とは？

高齢者の「リロケーションダメージ」を理解しよう

こんにちは ピーエムシー株式会社の斎藤洋です。

3月のこの時期は、卒業や転勤、引っ越しなど、生活環境が変わるタイミングでもあります。生活環境の急激な変化は、私たちの心身に大きな負担をかけることがあります。

今回は、「リロケーションダメージ」という視点から、高齢者の環境面の支援を考えてみようと思います。

リロケーションダメージとは？

リロケーションダメージとは、高齢者がこれまで暮らしていた環境から離れ、新しい生活を始める際に感じる身体的・精神的・社会的な負担のことを指します。特に介護施設へ入居する際に発生しやすく、慣れ親しんだ場所や人間関係から切り離されることで、体調不良や気持ちの落ち込みが生じることがあります。特養や老健などの入所施設へ新規利用の方が入居されたとき、「事前情報とご利用者の状態が全然違うが、担当者は事前面談をちゃんとやってくれたのだろうか」など、現場の職員がモヤモヤした思いを感じてしまうという話を時々聞きます。

実は事前情報が間違っているというよりも、生活環境の急激な変化に高齢者自身の心身の状態が大きく影響を受けて状態が変化している事が多いのです。

リロケーションダメージの症状と高齢者の反応

リロケーションダメージは、施設入居後1週間程度で現れることが多く、様々な症状が出現します。

- ① **身体的側面**：環境の変化により、生活リズムが乱れ便秘や食欲低下などが見られる
- ② **精神的側面**：気持ちの落ち込みや不安、無気力などの症状が出やすい
- ③ **社会的側面**：新しい環境に馴染めず、他者との関わりを避けるようになる

高齢者は新しい環境に適応するために積極的に施設生活を楽しまうとする人もいれば、怒ったり、泣いたりすることで適応しようとする人もいます。

特に認知症のある高齢者は感情の起伏が激しくなることがあります。「なぜそうなっているのか」を考えながら対応することが必要です。



また、高齢者本人が充分納得できていない状態で施設に入居するケースもあり、精神的に落ち込んでしまったり家に帰りた気持ちを抑えられないといった症状が出現することもあります。

リロケーションダメージを軽減するための支援策

リロケーションダメージを防ぐためには、高齢者が「自宅に近い環境で安心して生活できる」ような支援を行うことが大切です。

具体的には、以下のような対応が有効です。

- ① **身体的支援**：なるべく自宅と同じような環境をつくり、プライバシーを確保する
- ② **精神的支援**：本人の大切な物を持ち込めるようにし、職員が受容的な関わりを意識する
- ③ **社会的支援**：他の利用者との交流を促し、施設内で役割を持てるよう工夫する

精神的支援について本人の大切なものを施設に持ち込んでいる方の割合は、日本では16%程度であると言われており、決して多いとは言えません。

主任研修講師 斎藤 のつぶやき

介護施設における認知症高齢者の生活環境の整え方については、『PEAP』という考え方があります。

興味のある方は、 **PEAP 認知症** でインターネット検索をしていただければと思います。

